

臨濟録の序者郭天錫について

陸川堆雲

私は拙著「臨濟及臨濟録の研究」に於て序者の一人なる郭天錫については未だその傳を詳かにしないと遺憾の意を記して置いたが、その後その全貌と輪廓について若干の所見を得たので其責任の一部を果し得た様に思はれる。敢て是を同好に頒ち又大方の示教を俟つものである。

註 臨濟録には馬防、林泉從倫、郭天錫、五峯普秀の四序が傳へられる。これについては拙著「臨濟及び臨濟録の研究」に詳論がある。

一 郭天錫の略傳

郭天錫は鎮江京口の人で名は昇、字は天錫又は祐之、號を雲山又は北山と稱した。父は義山先生と云ひ當時の學者であつた。祖母が神に禱つて天錫が生れたので、それに因んで名がつけられた。天錫と云ふのは天より賜はると云ふ字義で、書經に天乃錫^ヒ王勇智^ヲ表^ニ正萬邦^ヲとあるが一例である。昇の字音はとで神前の獻器のことだとかである。

身長八尺、狀貌傀梧、美髯を貯へて居たので世人は郭髯と呼んだ。當時矢張り美髯の鮑氏があつたので是を鮑髯と呼び、常に併稱されたと云ふことである。日常酒を嗜み鯨吸の量であり談論風發、正を持って敢て人に下らず、爲に畏厭せられ處世上順風に乗ることは出来なかつた。晩年には自ら省みて専ら自抑し號を退思と稱した。最も文墨に長じ書畫共に精妙、その聲名は一世に高く、米元章や趙子昂と並び稱され、これ等の墨蹟は人の渴仰するところとなり

世寶として珍重せられた。

又好んで方外の士と交り談空竅玄、禪侶との交渉も深く、山林の清饒鍾を接したと傳へられる。臨濟録の序文もかゝる縁由で書くに至つたものと思はれる。天錫は官途に志が有つたようであるが、地方官や屬吏の程度で終りこの方面に所志を伸ぶるを得るには至らなかつたようである。されどその爲め沮喪するような人物ではなく、自ら好む風流生活の方面に屈を申し得たのは其生涯の爲めに喜びとせねばならぬ。

四方周遊の後郷里に歸り、病を獲て歿した享年五十六。元の順宗の至正元年頃と推定される。長命ではなかつた。三子あり長を永、仲を肇、季を啓と云つた。皆學者の系統であつたようだ。快雪齋集は季子啓の手になつたものである。以下關係資料に觸れつゝその面目を窺ふことにする。

二 客 杭 日 記

郭天錫に客杭日記と云ふものがある。これは杭州への旅行記で元の至大元年九月一日より十一月四日迄約二ヶ月餘に亘るもので、その記するところは杭州客中その地の文人墨客と交はり、山川名勝に遊んだことを記したもので風流に富んだ日記である。郭雲山日記といふものが四冊程ありこれはその中の一冊である。

客杭日記は不知齋叢書中に収録されており上野圖書館でも見られるが、東洋文庫所藏の武林掌故叢編には第五集にあつて、異本であり此方が善本で魯魚の誤りも少なく、又多少の新添も見られる。

雍正年中に書かれた清の學者厲鶚の序文によれば、この書は中國當時の人々の間にも評判の高かつたもので、従つて吾が徳川時代の文化年間に百俊徳により翻刻された。その序文によれば丁野南洋（名は祭字は君美、土佐の人、業を皆川淇園に受く）の所藏の客杭日記を見て大いに嘆賞し、是を底本として翻刻を期したところ南洋が病歿して、その書の所在を失したので不知齋叢書中より轉抄して翻刻したと書いてある。この翻刻本は句讀訓點を施してあり小

冊子ではあるが體裁の整つた善本である。

この書は旅行記として入蜀記や出蜀記と並び稱されたもので、この觀點から鰭刻が行はれたことは其跋文によりて窺知出来る。入蜀記は彼の陸放翁の蜀への旅行記で有名のものであるが、天明年間吾が國にても鰭刻された。それには柴野栗山の序文がある。それによると郭天錫の客杭日記は雜駁の感が免がれないが入蜀記は然らずと比較論をしている。これは入蜀記の序文だが少しその方へ肩を持つたものであらう。それは兎も角當時吾國の學者間にも客杭日記は有名であつたことを知り得るのである。

前記厲鶚がその末尾に至大二年二月天錫が焦山に宿した時の作であるとして次の詩をあげて妙甚しと賞している。

楊子江頭風浪平。焦山寺裏晚鐘鳴。

爐香未斷燈花落。喚起山僧看月明。

これは快雲齋集の終に載つてゐるものである。

(註) 客杭日記は郭天錫が臨濟錄の序文を書いてから十年後のことである。

(二) 客杭日記の翌年に趙子昂の臨濟正宗碑文が出来た。

(三) それから十二年後に吾國に於て臨濟錄の初版が開版された。

三 快雪齋集

郭天錫はその書室に快雪齋と名づけた。故に其詩集を快雪齋集と云ふのである。それは天錫が嘗て王羲之の快雪時晴帖の眞蹟を得て大いに喜び、因つて以て自ら書室に命名したものである。

快雪齋集は京大人文科學研究所の藏本、横山草堂叢書第一集に收藏されていることを私は聞き同司書室を煩はし、その好意ある斡旋によりその轉寫本を居ながらにして得て始めて之に接することが出来た。この本には天錫の友人俞

希魯が元の至正十五年に末子啓の需に應じて序文を書いてゐる。それによればこの書の來由と共に天錫の略傳を併せ知ることが出来る。又嘉慶四年趙魏と云ふ人の追序があるが是によつても更らに若干の事實を知ることが出来る。而して其跋文は乾隆十三年に陳慶年が傳經樓に於て草しているが、是によれば集中の詩文収録の次第が具さに記され又その覆刻迄の迂餘曲折が委しく記されている。

快雪齋集は詩文集ではあるが、天錫の詩文の一部分であつて自他の畫幅に題賛したものが多く、その他若干の文章があるのみであるが文墨に關するものが主である。他は散逸して傳はらぬとのことである。この書は又一面時人との交渉の一端を窺ふことが出来るものであるが、兎に角天錫に關し纏つたものとしてはこれが唯一であると思はれる。今茲には詳細を省略する。

四 元郭界詩卷

歷代名人書跋（佩文齋書畫譜目錄第七十八卷）によれば元郭界詩卷の跋文として次のものが記されている。

了堂上人方外友如天錫者情爲至矣。故其手跡盈篋。皆惜之不令有所散逸。雖俗士有不及之者。宜勸師拳々不遺忘。歐公於其々中也。錢良佑跋。（鐵網珊瑚）

（註）鐵網珊瑚の書品第七卷に載つゝいる跋文である。

鐵網珊瑚は欣賞齋原編となつてゐる。明の吳郡の朱存理、性父の著で書畫類に關する品藻を記したもので郭天錫に就ても種々記されている。

五 元郭界山居圖

歷代名人畫跋五（佩文齋書畫譜目錄第八十五卷）によれば、天錫の山居圖につき友人倪瓚が左の如く記してゐる。

天錫椽郎與予交最久。死別忽忽二十餘載。念之悵悵如何可言。錫山弓河上玄元道館錫麓玄丘精舍其畫壁最多。今或爲二軍旅居。或爲二狐兔之窟。頽垣遺趾風景亦異。雖予之故鄉。乃若異鄉矣。不歸吾土亦已十年。因勝伯徵君携此卷相示爲之展玩。感慨并敘述其嗜昔相與之所以。然者其中有不能自巳也。投筆淒然久之。

至正二十三年歲在癸卯。十二月十日夜。笠澤蝸牛盧中寫。倪瓚。(鐵網珊瑚)

猶同書に次の二つがある。

元郭昇雲山卷

米公元暉者游徑塢。登含輝亭。攬山青雲白樹色水光之勝。悟得豪端三昧。爲鄭王楊吳董宋郭范郡公擅長。初聞是說。實訝之。及元貞丙申春予寓山中。禪餘偕二三友。縱步是亭。目擊真態。亦有感發。乃信元暉悟是而得天巧。非浪說也。大德癸卯秋既下峰頂。乃今至順癸酉逾三十年。想舊游之樂不可復追。爲之慨歎。適又三月十有五日姑胥良禪人出示郭公天錫所作。亂山隱秀輕雲抹淡。矮屋藏林。短橋橫澗。朝曦夕靄。千狀萬貌。把玩至再不覺宿懷一時脫焉。恍如身臨亭際。神游物表上。殆不知人爲邪天就邦。抑郭得于米。邪米得于天。邪。善豪素一者辨之庶幾吾言得之矣。

鶴林釋契了

(續書畫題跋記)

元郭昇雲山過雨圖

右雲山過雨圖乃京口郭天錫用米元暉筆法而作也。峰巒模糊。林木清潤。宛然宿雨初霽。吾不識畫而亦以其可配前人是圖作于至順辛未。當時名公若虞邵菴柯鑑書皆有題詠。距今百有餘年而爲其同姓。嘗熟尹世南所得物固有定遇哉。世南爲尹有善政。較其愛民之心甚于愛圖特爲表著云。(張益文僖公集)

六 郭天錫詩卷

歷代鑿藏書三。(佩文齋書畫目錄第九十三卷)に郭天錫詩卷が記されている。その詳細はわからない。

七 郭祐之天錫號北山所藏

宋周密雲烟過眼錄（佩文齋書畫目録第九十三卷、歷代藏書卷三）

晉右軍得_レ告得帖又快雪時晴帖。皆真蹟。有_二米老跋_一。遂_ニ以_レ名_一齋且刻_レ石。葉森曾見_二此二帖_一。神韻精彩。

（註）この外に七種ばかり所藏の品目が擧げられている。雲烟過眼録は宋の周密の編者で四卷。寶顏堂祕笈卷二に收録されている。猶同書の歷代鑒畫三には次の二つがある。

王介石虎臣所藏

（上略）王維畫_二孟浩然_一像。昔爲_二趙碧澗_一由。祚後歸_二趙信_一之。又歸_二喬仲山_一。仲山又歸_二之郭北山_一。

郭佑之天錫號北山所藏

韓滉歸玄來圖又雙牛佳。

盧楞迦羅漢

（以下二十六種あり省略）

八 保母帖跋（三希堂石渠寶笈法帖第二冊）

右晉太宰中書令王獻之字子敬書保母帖……（中略）

金城郭天錫審定秘玩

| |
|----------|
| 天錫 |
| 金城 郭氏 |
| 快雪齋 |
| 北山 珍玩 |

（註）王獻之保母誌一。慶元間山陰有_レ人發地得_レ之。嘉定元年朝廷降_レ下盛_ニ以_レ漆匣_一藏_二於_レ捕訪庫_一。（同帖）

三希堂法帖によればこの保母帖の跋の精妙なる天錫の筆蹟が偲ばれて帖を閉づるに忍び難き思ひのものである。私はこの法帖の外天錫の肉筆なるものを書畫共に未だ見たことがない。

九 歴代畫史彙傳（成卷）

郭昇字天錫。一字佑之。號北山。京口人。爲平江路吳江儒學教授未浙江省辟充^{シテ}椽史。竹木窠石有米家風。書法出入趙孟頫。

この様に記されているが、佩文齋書畫譜卷三十七書家傳、同卷五十三の畫家傳九にも郭天錫の略傳がある。その他鎮江府志、圖繪寶鑑にもあるが煩を厭ふて省略する。

十 郭天錫と薩天錫と元詩選

郭天錫の詩集と略傳とが元詩選に載つていと云ふ。元詩選は長州顧俠君が元代の詩を選集したもので元百家集とも云はれ數卷になつてゐる。客杭日記の跋文によれば唐摹蘭亭の墨蹟に題する天錫の詩があることが記されている。私が元詩選を草卒に調らべたのでは是は見當らなかつた、天錫詩集と云ふが其中の成集にあつたが是は薩天錫の詩集であつた。薩天錫は本名を薩經歴都利と云つて元代の子孫である。名の意味に漢言にすれば濟善と云ふ意味だとのことである。薩天錫は學者であり元朝に重用された人であつて、文名噴々たる人である。この兩人は甚だ紛らはしき存在であるから、注意を要する。

元詩選の丙集の中に眞集賢奎の雲林集が収録されている。奎字は仲章、寧國宣城の人であつてその中に郭天錫について長詩がある。

送^ル郭教授歸^ル鎮江^ニ

長江日夜東南來。千巖萬壑雲屏開。樓船挾檣行若飛。(下略)
猶この詩中の一句に六年屋を京洛に買ふ云々とあるから天錫は京洛に家を買つて六年も假住しそれから家郷に歸つたものと見へる。

十一 監察御史のこと

臨濟錄の序文の末尾によると前監察御史郭天錫焚香九拜書と記されている。監察御史と云へば元朝の高官と思はれるから元史を一應見たが郭天錫については何も記されていない。客杭日記の跋文には「嘗て宣府の判官と爲る」と記されているが、快雪齋集略傳によれば地方の書院の儒學教授となり江浙行省の椽吏になつたことが記されているが、何れも元朝の顯官になつたことは認め難い。監察御史と云ふことについては未だ之を明らかにし得ない。(昭和二十六年仲秋日)

附記 本稿については、東京上野、美術研究所内、島田修二郎先生。京都北白川人文科學研究所司書室。東京東洋文庫等の御厚意に負ふところが多い。こゝに記して感謝の意を表す。